

研究論文

最近における記号論拡張の進展過程

—ツーリズム記号論基本原理研究の序章—

Expanding of Semiotics Today: From the Viewpoint of Tourism Semiotics

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学客員教授、名誉教授

キーワード：記号論拡張、ノン・レプレゼンテーション理論、レプレゼンテーション以上の理論

Key Words：expanding semiotics, non-representational theory, more-than-representational theory

Abstract：

This paper engages with the problems in expanding constructs of semiotics inclusive the theories of “non-representational” and “more-than-representational”, arguing “non or more-than-representational theories” have the theoretical effectiveness as the paradigms of semiotics today, especially for tourism semiotics, though some severe critical comments against them.

I. はじめに—本稿の課題

記号論に立脚した研究では、最近、研究領域を拡張する試みが盛んである。例えば現在の資本主義体制を記号論に立脚して批判的にとらえる試み、すなわち一般に“批判的記号論 (critical semiotics)”もしくは“記号論的マルクス主義 (semiotics Marxism)”といわれるものが進展する一方(例えば文献 G, B2, F1, K)、個別企業体等の組織を記号論に基づいてとらえ直す“組織記号論 (organizational semiotics)”が提起されている(代表的文献は Stamper のもの(文献 S5)。これら2つの方向について詳しくはΩ2)。

これらの例は、直接的には、研究適応領域の拡張、つまり横方向での進展といえることができるが、これには、ある意味で当然ながら、研究方法の進展、つまり縦方向での進展が含まれている場合が多い。

例えば、前記の“批判的記号論”のまとまった文献であるジェノスコ (Genosko, G.) の著書の書名は『*Critical Semiotics: Theory, from Information to Affect*』となっており(文献 G)、“affect”つまり人間行動である情動が、“批判的記号論”の生成の大きな要因になっているとするものであり、かつ、旧来のソシュール (Saussure, F.) やパーズ (Peirce, C. S.) などに代表される、記号そのものに立脚したものとは、質的に区別された観点にたつものであって、研究方法の進展をも内実とするものである。

この点をさらに広くとって、記号は人間にとって、単なる情

報ではなく、行動の指針になると解すべきものという主張を提起しているという観点からすると、フィンランドのピエタリネン (Pietarinen, A.) が「記号の意味とは、一定の状況のもとで一定の方法で示される行為習慣 (habit of acting)」(P2, p.4) と規定していることが注目される。

こうした記号論における横と縦との両方向における進展は、原則として同時的に進んでいるものと解されるが、こうした両方向の同時的進展を統合的に提示している近年の文献として強く注目されるものに、オーストラリア・西シドニー大学のウォータートン (Emma Waterton) とイギリスのヨーク、セント・ジョン大学のワトソン (Steve Watson) の2014年の共著書『ヘリテージ・ツーリズムの記号論』(文献 W1) がある。

同書についての書評等(例えば文献 S4, S6)を参考にして、総合的にいえば、同書は、ツーリズム現象をいくつかの記号論領域 (semiotic landscapes) としてとらえ、そのうえにたつてこれまでの記号論的研究に対し理論的方法論的な整理、とらえ直し、追加、つまり記号論的方法論の拡張が必要と提議し、そうした拡張されたツーリズム記号論の1分野としてヘリテージ・ツーリズムが展開されるべきことを主張するものである。

この場合同書でベースになっているものは、“情動的転回 (affective turn)”といわれるものである。それをウォータートン／ワトソンは、“エモーション (emotion)、パフォーマンス (performance)、エムボディメント (embodiment)、経験 (experience)” に志向する

ものと規定し、これを土台とした記号理論を総称的に“代表理論以上のもの (more-than-representational)”とよび、ツーリズム論は、こうした“拡張された記号理論”のうえに提示されるべきことを主張している。

そこでウォータートン／ワトソンによると、これまでの記号理論の方法論的進展段階は、まず、“代表理論の理論 (representational: 以下では“単なる代表”と区別するため、これは“レプレゼンテーション上の理論”と表記する)”という段階”と、“(総称的な) 代表理論以上の理論 (more-than-representational: 以下では“(総称的な) レプレゼンテーション上の理論”と表記する)”という段階”とに大別される。前者の“レプレゼンテーション上の理論”は、さらに“構造主義的理論 (structuralism)”と、“ポスト構造主義的理論 (post-structuralism)”とに分かれる (W1, p.4)。

本稿は、ウォータートン／ワトソンのこの記号理論進展のテーマを手がかりに、ツーリズム記号論の土台となる記号論原理、つまり上記で記号論方法論と述べたものの進展状況について考察することを課題とする。ちなみにバーガー (Berger, A.A.) は2011年、少なくとも社会科学では「何事も本質的には記号論的なものとしてとらえられ、説明されうるものである」と宣しているが (B1, p.107)、その場合記号論方法論には質的な進展があり、ヘリテージ・ツーリズムについてもこのことが不可欠な前提とされなくてはならない、というのが本稿の基本的立脚点である。

なお、参考文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

II. ウォータートン／ワトソンによる記号理論の進展段階

1. 構造主義的理論の特徴

ウォータートン／ワトソンによると、これまでの記号論方法論の発展段階は、前記のように端的には、構造主義的理論に始まる。この場合、構造主義的理論とは、これまで一般通例的に記号論といわれてきたものの多くをいうものであるが、ウォータートン／ワトソンの書でこれに属すとされているのは、ソシュール、パースおよびフーコー (Foucault, M.) で、例えばグレマス (Greimas, A.J.) は除外されている。グレマスが除外されているところにすでに、ウォータートン／ワトソンにおける記号論説の基本的方向性が示されている。

この場合ウォータートン／ワトソンによると、構造主義といわれるものは、記号現象、すなわち言語はじめ人間のコミュニケーション関係を代表し、それを統御しているルールを解明しようとし、それを構造として概念化するものをいうのであるが、その場合、代表と構造という2つの概念は、「構造主義では(現実の) 代表として示されているもの (representation) が (記号としての) 意味 (meaning) に翻訳されることになる」 (W1, p.15. カッコ内は本稿筆者のもの、以下同様) という関連にあると規定される。

この場合、ソシュール説とパース説とをくらべると、ソシュール説は記号現象がシグニファイアー (signifier: 端的には記号そのもの) とシグニファイド (signified: 記号で表象されるもの、端的には記

号が示す意味) との2要素 (two part model of the sign) で示されるとするものであって、それは記号現象について、“レプレゼンテーション (representation)”という機能よりも、“シグニフィケーション (signification)”の機能を果たすものとしてとらえられていると特徴づけられる。

これに対しパース説では、ソシュール説でシグニファイアーといわれる記号そのものが、“レプレゼンタメン (representamen)”として提示されており、パース説の方が“レプレゼンテーション”という趣旨にはより適合したものといえることができる。つまり、記号を何よりも“レプレゼンテーション”と考える場合には、パース説の方がより高く評価されるものという位置づけになる。

しかしその一方、ウォータートン／ワトソンは、ソシュールにより提起されている2要素説は、構造の2要素セット性、例えば事物 (things) 対理念 (ideas)、主観対客観、天対地、神対人間、矛盾の契機「A」対「非A」といった2契機による矛盾関係にあるものについて根源を解明するのに有用なものであり、例えばヘリテージ・ツーリズムでも、それ相当な意義があるものと評価している。この点に関連してはウォータートン／ワトソンが、さらにソシュール説について、歴史的要因を採り入れるフレームワークになっていると指摘していることが強く注目される。

すなわちそれは、ソシュール説では、周知のように、シグニファイアーとシグニファイドとの関係が恣意的なもの (arbitrary) とされている点に由来する。この点からみると、ある特定時点では、シグニファイアーとシグニファイドとの関係は、とにかく一定のものとなっていることが留意されるべきことであり、それを決める要因のなかには、それまでの歴史的な推移・事情があると理解されうることをいうものである。

つまり、ソシュール説で恣意的なものとされていることには、シグニファイアーとシグニファイドとの関係が、それまでの歴史的推移のなかで形成されて来たものであることが含まれている、少なくともそれを排除しないと解することができることに着目するものである。この点は、実は、もともとカラー (Culler, J.) により指摘されていたものである。すなわちカラーは、記号とその意味との関係が恣意的であるというのは、「記号は、全体としてみれば、歴史のなかで変わってきたものである」と言い換えてもいいものであると指摘している (C5, cited in W1, p.17)。

このように考えると、ソシュール説には歴史的観点が含まれており、さらには弁証法的アプローチの基本的土台となるものが内包されていると解されることができ、ヘリテージ・ツーリズムなどにとっても有用な土台となりうるものといえることができる。しかし他方、本稿の課題から注目されることは、ソシュール説には、次の点でパース説に及ばないところがある。それは、記号としての意味の伝わり方の理解においてであると、ウォータートン／ワトソンにより指摘されていることである。

すなわち、パース説では記号関係において記号のそもそもの形成根源として事実の対象である“オブジェクト (object)”

が措定され、それを含めて記号要素は、3要素から成るとされているのに対し、ソシュール説ではこれがないことに基づく。このことは、ウォータートン／ワトソンによると、記号の意味の伝わり方において、次のような違いとなっている。「ソシュールは、(記号の眼目である)意味(meaning)の伝わり方を確かに認識していたといえるが、しかしこの伝わるプロセスをさらに明確に(“オブジェクト”にまで遡って)解明したのは、パースであった」というのである(W1, p.17)。

この点はパースが、構造主義的な考え方よりも、より代表主義的な考え方にたっていたことを示すものであり、「記号=代表」という観点からは、パース説の方がより優先されるべきものとなることになる。

ところで、これまでのツーリズム記号論のなかで、ウォータートン／ワトソンのみとすると、特に挙げられるべきものにマキャネル(MacCannell, D.: 文献 M1)の所論がある。マキャネル説では、ツーリズム記号の3要素として、ツーリズム目的地すなわちサイト(sight)、サイトの説明・案内的なものであるマーカー(marker)、および、ツーリストの3者が挙げられており、形のうえでもパース説により近いものとなっているが、ここで注目されることは、ウォータートン／ワトソンが、マキャネルの所論で最も注目すべき点として、現代ツーリズムのいわば本質について、マキャネルが次のように述べているところを挙げていることである。

すなわちマキャネルは、「現代ツーリズムのデータを精査すればするほど、ツーリズム誘因物(tourism attractions)が、現代意識となっているものや世界観に直接つながる構造において、そのままの形で(無作為的に)単に整理して見せるだけのものとなっているという結論になる」と述べている(M1, cited in W1, p.19)。つまり、ツーリズムの現実には現代という時代に相応した理論的な解釈・整理という所作が全く認められない、というのである。

この点についてウォータートン／ワトソンは、ここには要するに、旧来的なツーリズムに対する批判が提起されているが、こうした批判は記号論的認識に基づいて可能になったものであり、こうした点からも記号論的認識では改めて次のような動きが起きてきたものと提起する。すなわち記号論的認識は、今や、「その対象について、静的なものにとどまるというような考えは棄て、時とともに発展・進歩するという考えにたつものであることを必須の性向として保持する立場にたつこと」である(W1, p.19)。そしてこうした考え方に基づいて、“構造主義的理論”に代わって登場したのが“ポスト構造主義的理論”であるとする。

2. ポスト構造主義的理論の特徴

この項の冒頭で、ウォータートン／ワトソンは総括的に、これまでの構造主義的理論は、要するに、(記号的)意味がどのようにして生まれるかを究明するところに問題意識があったが、ポスト構造主義的理論は、(そこにおいて解明された)意味につ

いて、その役割と効果について究明し、その意味を認識することを問題意識として生まれたものであると提議している(W1, p.20)。

この場合、ポスト構造主義的理論は、実際には、こうした問題意識の延長線上において、例えば記号を使って代表的に話すのは誰か、すなわちパワー(power)や特権(privilege)、コントロール力をもつものは誰か。従ってパワーのないもの(powerlessness)は誰かに目を向けるものとなり、この結果、言語や記号などにおけるこうしたパワーのアンバランスをもたらすものは何かについて究明することを目指すものとなった。

これがポスト構造主義的理論についてのウォータートン／ワトソンのとらえ方であるが、ちなみに、こうしたポスト構造主義的理論を含めて、その土台である記号論のあり方に対しては、いくつかの批判的見解がある。ウォータートン／ワトソンはそれをここで、つまりポスト構造主義的理論についての論議に関連して紹介している(W1, p.20)。このことは、ポスト構造主義的理論が、それまでの構造主義的理論の批判のうえにたつものであり、そうした批判を内蔵するものであることを意味している。

ウォータートン／ワトソンによると、例えばディクソン(Dixon, D.)／ジョンズ(Jones, J.P.) (文献 D3)は2004年、(記号論で提示されている)シグニファイアーというものは、現実社会で実在するものと1対1の対応関係にあるものでは全くない旨を改めて指摘し、そのうえにたつ記号論について、そのあり方を批判している。また2009年、スコット(Scott, H.V.: 文献 S2)も同様に、(これまでのような)“レプレゼンテーション”(だけに限定するようなもの)は、決して現実をそのまま反映したもの(mirror-images of reality)ではないと述べている。

しかしこうした批判のうえにおいてウォータートン／ワトソンは、2者対抗性に立脚する考え方は、なんらかの形でこの社会に実在する現実の2極対立性・2重性を反映するものであり、かつ、それを推進するものとなってきたと主張し、さらに、こうしたとらえ方においてパワーを持つと想定されてきたものは、一般的には、白人、男性、西洋人であると指摘している。ウォータートン／ワトソンが言わんとするところは、ここにある。こうした観点は、まさにポスト構造主義的理論をふまえることによって可能になる。

ウォータートン／ワトソンによると、ポスト構造主義的理論を特色づける今1つのものは、ディスコース(discourse)の重視である。この場合主として念頭におかれるのはフォーコー説で、それは社会的文化的コンテクストに基礎をおき、言語使用を超えるものであって、意識を形成する身体的な状況にまで及ぶものと規定される。ただしこの点について、ウォータートン／ワトソンは次のようにコメントしている。

すなわち、ディスコースについての構造主義的記号論における通例的な考え方では、ディスコース能力(potency)に焦点がおかれるから、以上のような意味づけは、それをを超えるものと解されるであろうが、「重要なことは、これによってディスコー

スが社会経済的プロセスのなかに位置づけられ、そしてディスコースが社会におけるイデオロギーと知識に関連している関係が明らかになるところに、すなわちラザール (Lazar, M.M.: 文献 L) がすでに指摘しているように、ディスコースを“意味のポテンシャル (meaning potential)” としてとらえようとするところにある」と論じている (cited in W1, p.21)。

ちなみに、ポスト構造主義的理論が生起したのは、前記のパワーの構造説明という点においても、ディスコースの重視傾向という点でも、概ね 1980 年代であった (W1, pp.20-21)。その胎動期というべき 1970 年代は、世界的に反体制運動が盛んな時代で、ポスト構造主義的理論にはそれが反映されている面がある。

ウォータートン／ワトソンはこの点について、「ポスト構造主義理論の背景になったものは、当時における (それまでの) 構造主義的理論に対する不満を背景に、言語や代表の仕方 (representations) の問題が政治化し、それが現代社会における批判対象事項 (critical issues) になったためである。…… (それまでの) 構造主義的理論は、言語のうえでも代表の仕方でも、排除 (exclusion)、貶斥 (marginalization)、削除 (excisions)、除外 (cuts)、無視 (absences) などを促進・宣伝する道具に使用されたものである」と書いている (W1, p.21)。

ちなみに、1980 年代はテレビが一般家庭に必須的備品として完全に定着していた時期で、「こうしたメディアの普及と、画像的にみられることの確立は、計算されたマニピュレーションにおいて決定的な役割を演じるものであったが、このことはツーリズム分野やヘリテージ分野でも同様であった」 (W1, p.21)。

この点は、記号論的分析が世界的に大いに盛んになったところに現われている。カールソン (Carlson, M.) の調査によると、こうした文献は、1980 年代には 100 点以下であったが、1990 年代には実に 1,100 点以上になっている (C3, p.130)。本格的な記号論立脚の研究は 1990 年代に始まるとみられるが、これとともに記号論的研究の内容も進展している。

すなわちウォータートン／ワトソンは、今や「構造主義的理論の中心であるところの、“レプレゼンテーション” とは何かについてみると、それは実写 (description) にあるというモットーは捨て去られ、その代わりに意味 (meaning) の解釈者 (interpretation)、教育者 (educators)、定立者 (constructors) たるところにある、という印象のものとなった」 (W1, p.22) と述べている。つまり、事実の報道ではなく、プロパガンダの有力手段になったというのである。

従ってウォータートン／ワトソンによると、ポスト構造主義とは何かについてイメージする場合最も重要な結論は次のようなものになるという。すなわちそれには「該当するディスコースが異常に多い。それらのものは常に支配 (dominance)、権力 (power)、統御 (control) をめぐって相互に競争し合っている。これは、ディスコースでは、その力において強弱があるためである。……それ故にここで大きな課題であるのは、支配的なもの

のとなるために用いられる、外部からは見えない力や手段について、解明することである」 (W1, p.22) というのである。

ウォータートン／ワトソンによると、こうした立場にたつ論者には次の者がある。すなわち、ダン (Dann, G.M.S.: 文献 D1)、フェイアリ (Feighery, W.: 文献 F2)、メツセラ (Metusela, C.) / ウェイト (Waitt, G.) (文献 M2)、モーガン (Morgan, N.) / プリチャード (Pritchard, A.) (文献 M3)、アーリ (Urry, J.: 文献 U) などであるが、そのうえにたつて、「これらの論者のアプローチが、パースなどに代表される構造主義的なレプレゼンテーションと異なる点は、これらの論者では説明目標が、純粋に言語的なものから、パワーやコンテキスト、歴史等についての究明という幅広いものに移行しているところにある」としめくくっている (W1, p.23)。もっともアーリについては、この方向で充分といえるような展開をしていないという見解もある (S1, p.108)。

これをみると、今や記号論は単なる記号現象の解明以上のものであり、その土台となっている現実そのものの分析・解明に主たる目標があると解されるべきものに進展している。これが、“代表理論以上のもの” といわれるゆえんである。ただしこれは、スリフト (Thrift, N.J.: 文献 T) のように“代表的でない理論 (non-representational theory: NRT: 以下では原則として“ノン・レプレゼンテーション理論”と表記する)” とよんでいるものもあるが、両者は、旧来理論における“代表” という考え方はもはや不適当、故にそれに固執することはできないという点では、共通する。

それ故ウォータートン／ワトソンは、この両用語を併せて“ノン・レプレゼンテーションもしくはレプレゼンテーション以上の理論 (non- or more-than-representational theory)” と総称するとともに、見出しとしては、単に“レプレゼンテーション以上の理論” と名づけている (W1, p.3)。ここでは、これに倣い、“(総称的) レプレゼンテーション以上の理論” とよんで、序論的にその特徴を考察する。

3. “(総称的) レプレゼンテーション以上の理論” の特徴

まず、“(総称的) レプレゼンテーション以上の理論” とは、原理的にどのようなものかについて、ウォータートン／ワトソンは次のように規定している。すなわち、まず本稿でこれまでに既述の 2 つの形態、すなわち“構造主義的理論” と“ポスト構造主義的理論” とは、(例えば記号において) 意味が作り出される仕方 (how) と根拠 (why) について究明しようとしたものであったのに対し、この方向は (記号にかかわって起きる) 人間の行為 (doing) について論究しようとするものである。その際方法となるものは“情動的アプローチ (affective approach)” であるというのである (W1, p.25)。

情動とは何かについては既述のところであるが、記号論のこれまでの 2 形態、すなわち構造主義とポスト構造主義との違いを端的に示すために、ごく一般的に事例的にいうと、例えば交通信号で赤信号が停止信号を意味するという場合、「赤信号=停止信号」というルール (意味) は恣意的なものという

のがソーシャル・レベルの考え方であり、そうしたルール（意味）は“誰が”決めたかを問うのが、前項のポスト構造主義の考え方といえる。これに対しここで取り上げる“（総称的）レプレゼンテーション以上理論”は、例えば赤信号から青信号になり、それを見て進む行動をするような場合、その人（徒歩横断者や車の運転者等）はどのような身体的な動き・反応をするものか、あるいはせねばならないか、を問うものである。

こうした場合には、該当者ではまず進路の安全状況を確認することが必要になるが、そうした行為は身体的にどのようなされるものか、そもそも身体的に可能なものか、というレベルにまで立ち入って究明せんとするものである。故にこの方向は、何よりも、これまでの記号論のように単に見ること、あるいは見えること（the visual）にとどまることを超えようとするものであり、記号の示すものと、意味するものとを区別し、それを単に代表的なものとかディスコース的なものとししか見るのではなく、関連する他の人間や事柄とのかかわり合いにおいて主体的に行動したり、相互に行動し合ったり、時には受動的に行動することを惹き起こすものとしてとらえようとするのである。

これを前記のように、“ノン・レプレゼンテーション以上理論”とよんだのはスリフトであるが、スリフトは、旧来の“レプレゼンテーション以上理論”には、“離れている距離感がないこと”、“コード化（codification）できればいいものになっていること”、“口頭で述べられること（speech）、認知されること（cognition）、見えること（vision）だけを優先させるものであること”などにおいて、現代の記号論として原理的に難点があると論じている（cited in W1, p.26）。

さらに、例えばプレnderガスト（Prendergast, C.: 文献 P3）やウットモアー（Whatmore, S.: 文献 W2）は、現在では“旧来のレプレゼンテーション以上理論”を超えるものが必要とされているが、それは端的には次のような事情に基づくとしている。すなわち、これまでであったもので廃棄すべきものはないかという問題意識にたつのではなく、例えば意義あるのはどこかを考えること、つまり、話にはなっていないメッセージのなかで伝えるべきものはないかを精査することであり、習慣や熟練として身に付いているものの行為能力などについて、その意味や意義をとらえようとするのである。

これは、ウォータートン／ワトソンによれば、要するに、“旧来のレプレゼンテーション以上理論”では、人間生活の中心となっているもののうち目に見えないものは否定され、例えば体験やエモーショナルなもの、情動的なものはとらえられないものになっていることを批判しているものであり、別言すれば、旧来の単なるシグニファイング体制を超えること、それを先に進める必要があることをいうものである（W1, p.27）。

故に“ノン・レプレゼンテーションもしくはレプレゼンテーション以上理論”への進展は、これまでの記号論関連文献のなかにあったギャップを埋めるものと位置づけられる。このギャップは、例えば、旧来の記号論的試みでは、ヘリテージ

誘因物とツーリストについて現在の時点で実際に起きているものや起きているはずのことについて真に理解する試みをしないで、その外面的な分類化や類型化だけに志向するものであることから生まれているものである。

このことは、換言すれば、いわゆる記号現象を身体的な動きに関連させて理解することが必要ということをも主張するものであるが、ただしこの場合“身体的な動き”は、あくまでも「社会性と生物性（biology）の両者が同時的に、かつ本気の形で、貫通するもの」と規定されるものであることが注意されねばならない（W1, p.27）。

ウォータートン／ワトソンの所論は以上とし、次に同書で“ノン・レプレゼンテーションもしくはレプレゼンテーション以上理論”として一括されているものを分け、まず、“ノン・レプレゼンテーション以上理論（レプレゼンテーション以上理論ではない理論）”について、ドイツ・ブレーメン大学のディルクスマイヤー（Dirksmeier, P.）／ヘルブレヒト（Helbrecht, I.）の論文「時間、ノン・レプレゼンテーション以上理論、『パフォーマンス的転回』：質志向的社会研究における新しい方向に向けて」（文献 D2）をレビューする。これは直接的にも“質志向的社会研究（qualitative social research）”を論究対象とするもので、まさに記号論原理を論じているものと解される。

Ⅲ．“ノン・レプレゼンテーション以上理論”の大綱

1. “旧来的レプレゼンテーション以上理論”の問題点

ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトの出発点になっているテーゼは、“ノン・レプレゼンテーション以上理論”は何よりもパフォーマンス志向的な考え方に根源をおくものであるが、この観点からすると、“旧来的レプレゼンテーション以上理論”では次のような問題点がある。それは、パフォーマンスを記録しているもの、例えば人の話や文書などは、パフォーマンスそのものの時点からすれば（テレビやラジオなどの同時放送を別にすると）将来時点のものであるということである。

つまり、理論や学問などでパフォーマンスとして示されているもの、すなわちパフォーマンスのレプレゼンテーションとされているものは、当該パフォーマンスの行為時点からすれば、すべて将来においてなされたものであって、時間的にずれがあるというのである。

ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトは「われわれのテーゼは、次のようなものである。すなわち現時点の問題をリチュアル（ritual: 儀式）理論にアウトソーシング（外注）することが行われるが、それによってパフォーマンス（論）は、すでに発生の時点について誤認（genetic fallacy）が起きるという論理的誤謬を内蔵するものになる。つまり、ある出来事について一次的な（primary）資料といわれるようなものでも、価値づけや意味づけでは、当該歴史的時点における実際（真実）のもの（genesis）を必ずしも正しく伝えたものではない、ということである」と宣し、そうしたことを防止できる新しい方法が必要と主張する（D2, p.1）。

そこでまず、パフォーマンスとは何かが論じられる。パフォーマンスは、1990年代中葉以降における“パフォーマンス的転回”を契機にこれを広く解釈し、例えば日常生活上の行為も含めてとらえられるものとなり、また比喩 (metaphor) なども考察対象になったとする。この点についてディルクスマイヤー／ヘルブレヒトは「こうしたパフォーマンスとしての比喩は、伝統的な社会科学では、レプレゼンテーションをさも真正な (genuinely) もののように提示しなくてはならないような場合には歓迎されないものであったが、……しかし (新しい) パフォーマンス論では、テキストのいかによりも、行為そのものを摘示しようとするものである」と宣している (D2, p.4)。

このうえにたつて、通例的社会科学でも、パフォーマンスのレプレゼンテーションにおいて事実の正確な (precisely) 記述が求められるものとなってきたが、そこではそれは所詮不可能であるために、複雑性 (complexity) の考えが起き、条件依存性 (contingency) などといったものが指導原理になってきたと、この点を締めくくっている (D2, p.5)。

以上からもわかるように、ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトの場合、“ノン・レプレゼンテーションな理論”の大きな柱となっているものは“時 (time)”である。そのキーワードは“同時性 (synchronization)”であり、そのために“通常のレプレゼンテーションな理論”の時間過程に対しなんらかの形で“介入 (intervention) すること”がポイントというのである。このための1つの方法が実験 (experiment) であり、これが“ノン・レプレゼンテーションな理論”の大きな特徴であるとしている。そのうえにたつて、“ノン・レプレゼンテーションな理論”は体系的にどのようなものかを改めて考えると、ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトによると、それは次のように提示されるものである。

2. “ノン・レプレゼンテーションな理論”とはどのようなものか

ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトによると、“ノン・レプレゼンテーションな理論”は、イギリスの場合、根源的にはすでに1960年代におきたリリー (Bridget Riley) 等による文化的美追求運動に始まる。リリーは美的問題に対し純粋に幾何学的なアプローチを導入しようとしたものであるが、それには実験により物事をとらえようとする考え方があり、それが、“旧来的なレプレゼンテーション”により物事はとらえられるという考え方に対する批判となって現われ、“レプレゼンテーションにとらわれない”いう考え方を生むものになった、といわれる (D2, p.8)。

この新しい考え方のエッセンスは、カールソンによれば、「実在 (the real) を最も実在的な形 (most real forms) でとらえる」と表現されるものであり (C2, cited in D2, p.8)、これが“ノン・レプレゼンテーションな理論”の最も根本的な指導基線をなすとされている。

これまでの“単なるレプレゼンテーションな理論”との対比でみると、これまでのものは何よりも言語や言葉 (それに類す

るものを含む。また話したことや書かれたことを含む) による認識が中軸的なものをなし、基本的にはそれを超えるものではなかった。つまり、レプレゼンテーションとは言語により示されるものであった。

方法論的にいえば、“旧来のレプレゼンテーションな理論”では実在はそのまま直接に知覚することが不可能と考えられるのに対し、“ノン・レプレゼンテーションな理論”では、経験・パフォーマンスがすべてに優先するという立場をとる。すなわち、“ノン・レプレゼンテーションな理論”ではレプレゼンテーションを超えること、それでは示されないものに志向するものと規定される。

この点についてディルクスマイヤー／ヘルブレヒトは、「“ノン・レプレゼンテーションな理論”では、主体が事象について (旧来理論のように) いわゆる科学的な意味でどのように理解するかということではなく、それを直観的に (intuitive) どのように把握するかに焦点がおかれる。…… (この意味で) それはパラダイム転換 (paradigm shift) である。…… (一言でいえば) それはあくまでも実践志向的なもの (practical) であって、単なる認識を求めるもの (cognitive) ではない。……つまり、それは単なるデータの収集・評価を求めるものではない」と述べ、締めくくっている (D2, p.9)。

ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトの所論は以上とするが、ツーリズム記号論の観点からはさらにブサー (Buser, M.) の2014年の論文「計画の理論と実践におけるノン・レプレゼンテーションで情動的な雰囲気を通しての思考」(文献B3) が有益なものと思われる。そこでツーリズム理論関連的な諸点に限定して、この論文について考察しておきたい。これは、“ノン・レプレゼンテーションな理論”といっても、少なくとも現在ではまとまった統一的なものがあるのではないことを示すものでもある。

3. “ノン・レプレゼンテーションな理論”についての補足

ブサーは冒頭において、“ノン・レプレゼンテーションな理論”は「(計画化にかかわる) エージェントの概念について次のものを含むよう拡大することをいうものである。すなわちそれは、“人間の身体以上のもの (more than human bodies: 物的エージェント)”を含むよう拡大すること、そして日常的な実践と場所の身体にかかわる経験 (the embodied experience of place) に焦点をおくよう拡大することである」と宣している。ツーリズム理論からすると、さしあたり、ここでは“場所にかかわるに身体的な経験”が提議されていることが強く注目される。

これに照応した叙述をみると、まず「場所の経験というオーラ (aura) と雰囲気 (atmosphere) とはどのようなものかが究明されるべきもの」として提示され、その場所の例として、“静かな英国の田園地方 (English countryside)”や“ニューヨークのスカイライン風景”などのツーリズム有名地が挙げられている。このうえにたつて、「ところが、このようなオーラ・雰囲気・特性 (characters) についてみると、それらは人に気付かれないよ

うなものとなり——つまり“レプレゼンテーションではないようなもの”となって——情動的な関係・交互作用・感動 (sensation) を生んでいるにもかかわらず、このことは解明されないものであった」と書いている (B3, pp.228-229)。

ここには“ノン・レプレゼンテーションな理論”が、これまで“レプレゼンテーションされてこなかったもの”を“レプレゼンテーションすること”に志向したものであることが示されているとともに、ツーリズム論でもこうした“ノン・レプレゼンテーションな理論”への志向性が不可欠であることが提議されている。

さらに、この場合指導基線になるものは“情動的な雰囲気 (affective atmosphere)”であるとされ、それは「場所の経験と関係性 (place experiences and relations)」のなかにあるところの、人には気付かれにくい感動と情動を考察するための、ダイナミックな関係性がある場所エンカウンター (encounters) により生み出される集団的な一連の情動」と定義されるものとされている。

この場合ブサーは、“ノン・レプレゼンテーションな理論”が直接的にはフランスの著名な哲学者、ドゥルーズ (Gilles Deleuze) に始まるものとしている。ポスト構造主義理論などのいわゆる“レプレゼンテーションな理論”では、現にあるもの (the present) の忠実なコピーや描写 (doubling) がいわゆる真理 (truth) とされるが、これは誤りであり、ドグマチックな観念であることを指摘し主張したのは、ドゥルーズである。少なくとも“ノン・レプレゼンテーションな理論”はここに始まる (B3, p.229ff.)。

これは周知のように、一般的には“違い (difference)”の問題といわれる (cf.C4)。前記で述べたディルクスマイヤー／ヘルブレヒトの指摘している“時間のずれ”も、要するにこの“違い (difference)”の問題といえる。ドゥルーズによると、“違い”は本質的には否定 (negation) から生まれると規定される。というのは、“ある事や物 (例えば物事 A)”であることは、すなわち“他の事や物 (非 A) でないこと”に基づくからである。このことをブサーは、否定とは“すでに安定的に存在するもの (already existing stable : identities)”との“違い”であると説明している。

ブサーは、ドゥルーズの所論を中心に“違い”について総括的に次のように提議している。すなわち「“違い”の概念はこれまで長く地理理論に不可欠なものとなってきた。ところが、まさに“違い”とは何か、“違い”はどのように作用するものかについて、考察する地理学者は稀であった。故に“違い”のとらえ方にはいくつかのものがあ、そのなかには対称的なものもある」。

これは本稿筆者としては、現代の差別化戦略に倣って、“違い”を“差別化”と言い換え、かつ、地理理論を“ツーリズム地戦略”と言い換えると、現代ツーリズム地戦略の最も顕著な格率となる。すなわち、“差別化の概念は、これまでツーリズム地戦略にとって不可欠なものであった。しかし差別化にはどのようにしたらいいかについて真剣に論じるツーリズム論者は稀であった。故にそれにはいくつかの対称的な考え方がある”ということになる。

ちなみにドゥルーズは、“違い”について深く考察しているものとしてつとに有名であるが、かれは“違い”について、“それ自体のなかにあるもの (difference-in-itself)”と、マルクスなどに由来する“弁証法的なもの (dialectical difference)”とがあるとしつつも、(少なくとも)「地理における弁証法的思考の受け止め方と展開の仕方を見ると、キーポイントになっていることは、それが“それ自体のなかにあるもの”と類似点の多いものとなっていることであり」、「こうした違い」は、多くの場合現象的にはレプレゼンテーションに依存するものとされていることである、としている (C2, pp.9-11)。

“ノン・レプレゼンテーションな理論”については以上とし、それとは区別されたものとしての“レプレゼンテーション以上の理論”について、次に考察する。主として考察対象とするものは、スイス・チューリヒ大学の地理学者、ミュラー (Müller, M.) の論考「レプレゼンテーション以上の政治地理学」(文献 M4) である。これは、一般的に“レプレゼンテーション以上の理論”とは原理的にどのようなものをいうかについて論究したうえで、“情動とエモーション”、“社会的物質的アサンブラージュ (socio-material assemblages: 集結物)”および“レプレゼンテーションなもののプレゼンティング (presenting) とプレゼンシング (presencing)”について特に論じているものである。ここではツーリズム記号論原理に焦点をおいて考察する。

IV. “レプレゼンテーション以上の理論”の概要

1. 概要

ミュラーは、冒頭において、“ノン・レプレゼンテーションな理論”の代表的論者スリフトが、通常のレプレゼンテーション理論に対し、テキストやイメージについてみると、さも催眠術をかけられたようにレプレゼンテーションに傾注しきってしまっているものと批判しているところを引用し、少なくとも問題意識では、ミュラーのいう“レプレゼンテーション以上の理論”は、“ノン・レプレゼンテーションな理論”と変わるところがないと宣している。

そのうえで、“レプレゼンテーション以上の理論”は、事柄に対し人間が主たる動因者・起動者であるという考えに終止符をうとうとするものであり、これは、「世界は意味的には人間により作り出されたという考え方にたつところの、旧来の純粋な記号論的な考え方 (purely semiotic understanding) に対し、反対の立場をとるものである」と提議している。

ただしここで注意されるべきことは、ミュラーが続いて次のように付け加えていることである。すなわち「しかしながら、“レプレゼンテーション以上の理論”は、“レプレゼンテーション”を全く放棄しているものではない。そうではなくて、“レプレゼンテーション以上”というのは、意味の創出過程には実践 (practice)、情動 (affect) および事物 (things) が含まれ、織り混ぜられていることを強調するためのものである」と書いている (M4, p.3)。

つまり、“レプレゼンテーション以上の理論”は、“これまでのレプレゼンテーションな理論”を含み、そのうえにたち、かつ、それ以上のものをも取り入れるものである、というのである。これに対していえば、前節で考察した“ノン・レプレゼンテーションな理論”では、“旧来のレプレゼンテーション”を排除し、“そうした単なるレプレゼンテーション”ではないところに追究すべき分野があるというニュアンスが強い。

ミュラー説に戻ると、かれのいう“レプレゼンテーション以上の理論”は、本来「多様で取捨選択的なもの (diverse and eclectic) である」と宣し、例えば指導基線となる基本論点も論者により多様であると断っているが、ミュラーとしては、端的にはそれは次の5項目に示されるものとしている (M4, pp.3-4)。

第1に、この世界はパフォーマンス実践 (performative practice) を通じて形成されているものと考ええる。故に実践や分析の基本単位であるところの、新しい社会的物質的結合 (new socio-material association) が絶え間なく生成しているが、それはパフォーマンス上の質に由来するものである。

第2に、世界は常に作り出されているものと考ええる。固着した安定的な状態というものはない。最高なものは偶然的なものであって、期待して生まれるというようなものではない。

第3に、世界は情動的なものと考ええる。経験したものと経験したことが生き活きとした形で直接伝わるのは、われわれの身体 (body) を通じてである。情動は認識や意識を超える感覚の重要性を強調するものである。

第4に、この世界は人間以上のもの (more than human) と考える。それには事物や動植物などが単なる受動的対象以上のものとして参画する。これらのものは織り混じり合い、ハイブリッドな社会的物質的なアサンブラージュ (assemblages) として現れるが、これは人間と非人間的なもの (non-human) とのアサンブラージュであり、これが人間の経験を共に規定するものと考ええる。

第5に、“レプレゼンテーション以上のもの”についての研究は、実験的なものと考ええる。これにより生まれるセンセーションについて多様な記録を持つことが肝要であるが、そのためには“レプレゼンテーション以上のもの”に取り組む研究が必要である。しかもそのプレゼントとプレゼンスについて新しい様式を必要とする。

これらは“レプレゼンテーション以上の理論の綱領”といっていってもいいものであるが、この場合キーポイント (key axes) となるものは、既述のように、次の3者であるとされている。

2-1. 情動とエモーション

情動についてとにかく論究したのは、ミュラーによると、オランダの有名な哲学者スピノザにまで遡る (以下は M4, pp.5-7)。スピノザは、いわゆる情動の根源になるものには“欲望 (desire)”、“喜び (joy)”、“悲しみ (sadness)”の3者があるとし、それからさらに45種のものが導出されるとしている。それらには例えば、

“感嘆 (wonder)”、“屈辱 (contempt)”、“愛 (love)”、“怒り (anger)”などがある。

このうえにたつてミュラーは、情動については、これまでのところ、検討が充分に行われず、一般に認められるような定義はないものと断ったうえで、ごく簡単にいえば要するに、「行動に影響を及ぼす感情 (feeling) の強さ (intensities) をいう」とし、そして次の諸点が付け加わるものとしている (M4, p.5)。「第1にそれは、身体の中なかで、および、身体を通して作用するものである。第2にそれは、行為 (action) を駆り立て、目に見える行為を生み出すものである。第3にそれは、それぞれの主体を超え、いわば集団的に作用することが多いもので、個人を集団に巻き込むもの (entangle) である。つまり情動は、自らが他人に影響を及ぼすとともに、他人からの影響を受けるものである」。

これに対しエモーションは、こうした情動がまとまった形 (register) において“非レプレゼンテーションなもの”から“レプレゼンテーション以上のもの”になり、一種の調整されたものの (corrective) として作用するようになったものと規定されるとする。例えば政治的演説などでは、聞き手個人個人に別々のなんらかの情動を与えることが多いが、それがなんらかの集団的にまとまった形になるとエモーションとなって現われる (M4, p.5)。ちなみにここでは、“ノン・レプレゼンテーションなもの”と“レプレゼンテーション以上のもの”とがはっきり区別されている。

2-2. アサンブラージュ

情動、エモーションにより人々が必要な物的手段を持って集結することが起きる。これがアサンブラージュである (以下は M4, pp.7-8)。この場合英語の assemblage は、フランス語の agencement から来たもので、もともと“整理・組み立て”という意味を含んだものといわれる。この点をふまえてミュラーは、実体的にはそれは「質の異なったものを一定の時間の間集結させ、新しい行動を生みだすために整理・調整し (arrange)、組織する (organize) 過程」と定義できるものとし、その際アサンブラージュのための接着剤になるものが情動であると規定している。

このように提示されているアサンブラージュは、ミュラーによると、例えばラトゥールが唱えているアクターネットワークの考えに通じるものであるが、何よりも特徴的であることは、物的要素にそれ相当の役割があると高く評価していることで、この点ではいわば人的要素一辺倒的な社会構成主義 (social constructivist) などとは明らかに一線を画すものである。ミュラーは、この立場のスローガンは「物こそ課題 (matter matters)」であると書いている。

以上のうえにたつてミュラーは、総括的主柱として“レプレゼンテーション以上のものプレゼントとプレゼンス”について論じている (M4, p.8ff.)。

2-3. “レプレゼンテーション以上のもの”のプレゼンティングとプレゼンシング

この項の冒頭でミュラーは、情動、エモーションそして社会的物質的アサンブラージュは、“レプレゼンテーション以上のもの”を概念化するための通路であるが、旧来のアカデミックな行き方は共通して、コミュニケーションの“レプレゼンテーション様式”をよしとし、テキストや絵、写真などで提示することを旨としてきた（evidencing）から、“レプレゼンテーション以上のものの提示”は、方法論的デレンマに直面するのである、と書いている。これは、結局、1980年代、“レプレゼンテーションの危機（crisis of representation）”あるいは“レプレゼンテーション転回（representation turn）”といわれるものを惹起するものとなったが、ミュラーによると、“レプレゼンテーション以上の理論”は、直接的にはこれを契機に生まれたものと位置づけられる。

ここで“レプレゼンテーション以上の理論”のあり方、すなわちプレゼンティングとプレゼンシングが課題となったが、この点についてミュラーは、要するに「“レプレゼンテーション以上のもの”は、研究主体が、その研究上の事柄について旧来の方法では適切に処理できなくなり（fumble）、これまでの方法では進めなくなった（break down）ところで起きた」と書いている。そのうえで今後考究が必要とされる課題には次のようなものがあるとしている（M4, pp.11-12）。

2-4. 今後検討の論点

第1点は、「“レプレゼンテーション以上のもの”における政治（politics）ではどのようなことが論究されるべきであるか」という問題である。これは、本稿筆者のみるところ、ミュラーのこの論考がもとと政治地理学に関連したものであることに起因するところが大きい。ミュラーは、この点では例えば、“レプレゼンテーション以上の理論”で重要な要素であるアサンブラージュは、誰が組織し、どのような政治的性格をもつか、あるいは、その趣旨に反対のものがあるような場合、アサンブラージュの運営はどのようになるか、といった問題があるという。

第2点は、「“単なるレプレゼンテーションなもの”と“レプレゼンテーション以上のもの”とはどのように関連するか（tied together）」の問題である。ミュラーは、前者すなわち“単なるレプレゼンテーションなもの”は無用なものではなく、両者の相互促進的連携が不可欠と主張している。ここには、“ノン・レプレゼンテーションな理論”との違いが、明確に打ち出されている。

第3点は、「ミクロからマクロへの移動（move）はいかにしてなされるか」である。“レプレゼンテーション以上の理論”は、理論的にはもともと、個々の人間の日常生活における実態の様相というミクロ次元を出発点にする。少なくともそうすべきという立場をとるものであるが、なかんずく政治という問題はマクロ次元のもので、問題の様相が異なる。故に次元の上昇（upscale）が不可欠の問題となる。マクロ次元では、人間同士の関係が

中軸的問題となるから、例えば“正義性（justice）”が重要な原理となる。これが、次の第4点の問題となる。

第4点は、「正義性はどのようにして保障されたものとなるか」である。“レプレゼンテーション以上の理論”では正義性は人間同士だけではなく、物質との関係でも必要とされる。物質の正しい扱いであるが、近年におけるサステナビリティの考えは、この点でも大いに有用と思われる。

記号論におけるレプレゼンテーションにかかわる考察、従って本稿が課題とする記号論の横の拡張についての考察は以上とし、次に、本稿としての終りの言葉を述べてきたい。

V. おわりに一若干の批判的論評と今後の課題

以上の本稿の所論からも、“ノン・レプレゼンテーションなもの”もしくはレプレゼンテーション以上の理論”と総括される最新の記号論理論は、直接的にはスリフトの所説を大きな契機とするということが出来るが、スリフト説を含めたこうしたものに対する批判・論評は、例えばイギリスではかなり盛んである。例えばスリフト説のまともなものである2008年の書に対して、その書評においてトレント大学のルーサーフォード（Rutherford, S.: 文献R）は次のように述べている。

すなわち「“ノン・レプレゼンテーションな理論”では、これまでのような認識（cognition）や言語そして人間主体のみが事象に接近できる唯一の手段とする考え方は、これをカッコのなかに入れてしまい（bracketing）、その代わりに“人間・人間でないもの（non-human）・超人間的なもの（inhuman）による一体的なもの（entanglements）”ととらえるところに焦点をおくべきこと」が主張されている。ところが他方において、その書では例えばアクターネットワーク理論について「こうした複合体を扱うことには適したものでない」と批判されている。この点などは、ルーサーフォードによれば明らかに理論的混同であり、要するに、スリフトのこの書における所説は「理論的に乱雑なもの（promiscuous）といわざるを得ない」と総括されるものである、としている。

“ノン・レプレゼンテーションな理論”一般についても2010年、グラスゴー大学のパチェット（Patchett, M.）は「“ノン・レプレゼンテーションな理論”の目指すものや特性はどこにあるかについては、その生成以来、“ノン・レプレゼンテーションな理論”のプロパーな理論家のなかでも多くの論議があり、こうした実に多様な見解をとにかくまとめてきたものは、理論志向的方向（conceptual）と実践志向的方向（empirical）との間において（険悪な関係が生まれないよう）“一層民主的な関係”を保とうとする配慮（argument）であった」と評している（P1, p.2）。

近年におけるさらに強い批判としては2017年に、シンプソン（Simpson, P.）が『オックスフォード・ビブリオグラフィズ（Oxford Bibliographies）』において、スリフトの提唱した“ノン・レプレゼンテーションな理論”は、今や實際上、単一の理論（a singular theory）と言えるものではない。そしてそれは学問性格

上では“レプレゼンテーション以上の理論”の別の名称 (the alternative moniker) と言ってもいいものである。他方、“レプレゼンテーション以上の理論”は、“ノン・レプレゼンテーション上の理論”の“ノン (non)”という言葉の先鋭化を和らげようとするだけのものである、と評しているものがある (文献 S3)。

シンプソンのこうした批判には、何か先入観的なものがあるように思われるが、“ノン・レプレゼンテーション上の理論”にしても“レプレゼンテーション以上の理論”にしても、理論的な不充足性があることは否定しがたいように考えられる。本稿筆者としては、理論的にはこの点は結局、人間的なものと物的なものとの統合についてのより深い理論の確立がキーポイントになるものと考え、このためには、例えばアクターネットワーク理論について、さらなる突っ込んだ論究が有効な1つの方法と考える。この場合、“ノン・レプレゼンテーション上の理論”とアクターネットワーク理論との関連については、例えばグラスゴー大学のカドマン (Cadman, L.) が次のように指摘していることが強く注目される (アクターネットワーク理論についてはΩ1、Ω3参照)。

すなわちカドマンは、“ノン・レプレゼンテーション上の理論”とアクターネットワーク理論とは、相互に密接に関連したものではあるが、しかし同時に他方では、重大な違いがいくつか (some important differences) あるものでもある。アクターネットワーク理論では、人間的なものと非人間的なものとの方法論的シメトリ (methodological symmetry) にこだわるのに対して、“ノン・レプレゼンテーション上の理論”ではそうした点が少なく、日常生活上の出来事にかかわる人間の身体・主体 (human body-subjects) の実践に主眼をおく。ところが、まさに「この点こそ、アクターネットワーク論者が“ノン・レプレゼンテーション上の理論”に対し強く反対する点である」と書いている (C1, p.3)。

本稿筆者としては、こうした点からも“ノン・レプレゼンテーション上の理論”もしくはレプレゼンテーション以上の理論”におけるアクターネットワーク理論の意義が改めて論じられるべきものと考え、しかしこうした理論の根本的検討は、ウォータートン/ワトソンの理論展開に則していえば、その適用・応用であるヘリテージ・ツーリズムについてのかれらの所論の考察のうえにおいてのみ可能なものともいえる。こうした点も考えて、“ノン・レプレゼンテーション上の理論”もしくはレプレゼンテーション以上の理論”のいわゆる本義についてのさらなる究明は、今後の課題とするが、以下の点のみをここで紹介しておきたい。

それは、ドイツ・バイロイト大学のフッタ (Hutta, J.S.) が2015年の論考 (文献 H) で、情動は、単なる行動ではなく、従って単なる言語 (記号) ではなくて、一種の強烈な記録となるもの (registering of an intensity) である。故にそれでは“情動の表現 (expression of affect)”と“表現の情動性 (affectivity of expression)”との2側面についての論究が必要であり、“記号論の情動的過程 (affective life of semiotics)”すなわち“情動的存在論 (affective ontologies)”が究明課題になる、と提議していることである。

ここでは情動が、本来は、表現を含めて激しい行動をいうものであることが提示されており、“ノン・レプレゼンテーション上の理論”もしくはレプレゼンテーション以上の理論”における情動とは、本来、こうしたレベルのものであることが提議されているのである。

【参考文献】

- B1: Berger, A.A. (2011), Tourism as a postmodern semiotic activity, *Semiotica*, 2011 (183), pp.105-109.
- B2: Bergeson, A. (1993), The rise of semiotic Marxism, *Sociological Perspectives* (Sage Journals), <http://journals.sagepub/doi/abs/10.2307/1389?journalCode=spxb>
- B3: Buser, M. (2014), Thinking through non-representational and affective atmosphere in planning theory and practice, *Planning Theory*, vol.13, pp.227-243.
- C1: Cadman, L. (2009), Nonrepresentational theory / Nonrepresentational geographies, retrieved 2018, September 3, from: <http://book-site.elsevier.com/Nonrepresentational-theory-and-Geographies.pdf> (published 2009).
- C2: Carlson, M. (2004), *Performance: A critical introduction*, New York: Routledge.
- C3: Carlson, M. (2008), Intercultural theory, postcolonial theory, and semiotics: The road not yet taken, *Semiotica*, vol.168-1/4, pp.129-142.
- C4: Cockayne, D.G., Ruez, A. and Secor, A. (2016), Between ontology and representation: Locating Gilles Deleuze's "difference-in-itself" in and for geographical thought, *Progress in Human Geography*, vol.41, retrieved 2017, November 30, from: <https://doi.org/10.1177/0309132516650028>.
- C5: Culler, J. (1990), The semiotics of tourism, in: *Framing the sign: Criticism and its Institutions*, Boulder: University of Colorado Press.
- D1: Dann, G.M.S. (1986), *The language of tourism*, Wallingford: CABI.
- D2: Dirksmeier, P. and Helbrecht, I., Time, non-representational theory and the "performative turn" —towards a new methodology in qualitative social research, retrieved 2017, November 30, from: <https://geographie.hu-berlin.de/performative-methodology.pdf>
- D3: Dixon, D. and Jones, J. P. (2004), Poststructuralism, in: Duncan, J. and Duncan, N. and Schein, R. (eds.), *A companion to cultural geography*, Minneapolis: University of Minnesota Press, pp.79-107.
- F1: Fairclough, N. (2008), A dialectical-relational approach to critical discourse analysis in social research, in: Wodak, R. and Meyer, M. (eds.), *Methods of critical discourse analysis*, London: Sage, pp.162-186.
- F2: Feighery, W. (2009), Tourism, stock photography and surveillance: A Foucauldian interpretation, *Journal of Tourism and Cultural Change*, vol.7, pp.161-178.
- G: Genosko, G. (2016), *Critical semiotics: Theory, from information to affect*, London: Bloomsbury.
- H: Hutta, J.S. (2015), The affective life of semiotics, *Geographica Helvetica*, vol.70, pp.295-309.
- K: Kennedy, D. (2001), A semiotics of critique, *Cardozo Law Review*, vol.22, pp.1147-1189.
- L: Lazar, M.M. (2000), Gender, discourse and semiotics: The politics of parenthood representation, *Discourse and Space*, vol. 11, pp.373-400.
- M1: MacCannell, D. (1999), *The tourist: A new theory of leisure class*,

- University of California Press. (安村克己／高橋雄一郎／堀野正人／遠藤英樹／寺岡伸吾訳『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析』学文社)
- M2: Metusela, C. and Waitt, G. (2012), *Tourism and Australian beach culture: Revealing bodies*, Bristol: Channel View Publications.
- M3: Morgan, N. and Pritchard, A. (1998), *Tourism promotion and power: Creating images, creating identities*, Chichester: Wiley.
- M4: Müller, M. (2015), More-than-representational political geographies, retrieved 2017, November 30, from: https://www.academia.edu/15031515/More-Than-Representational-political_geographies.pdf
- P1: Patchett, M. (2010), A rough guide to non-representational theory, retrieved 2017, November 30, from: <https://merlepatchett.wordpress.com/2010/11/12a-rough-guide-to-non-representational-theory/>
- P2: Pietarinen, A., On the conceptual underpinnings of organizational semiotics from the pragmatist point of view, retrieved 2017, November 30, from: www.Helsinki.fi/Pietarinen%20.%20On%20the%20Conceptual%.html
- P3: Prendergast, C. (2000), *The triangle of representation*, New York: Columbia University Press.
- R: Rutherford, S. (2011), Book review: *Non-representational Theory: Space, Politics, Affect*, retrieved 2017, November 30, from: http://www.academia.edu/6340976/Non-representational_Theory-Space-Affect.By-Nigel_Thrift
- S1: Santos, F.A.P.d.S. and Marques, A.P.S. (2011), The importance of the consumption of semiotic signs for the competitiveness of the tourist destinations, *European Journal of Tourism, Hospitality and Recreation*, vol.2, pp.105-113.
- S2: Scott, H.V. (2009), Representations, the politics of, in: Kitchin, R. Thrift, N. (eds.), *International encyclopedia of human geography*, Elsevier, retrieved 2017, November 30, from: <http://www.kriso.ee/international-encyclopedia-human-geography-db-9780080449111.html>
- S3: Simpson, P. (last reviewed 2017), Non-representational theory, *Oxford Bibliography*, retrieved 2018, September 3, from: <http://www.oxfordbibliography.com/document/obc-978019984002/obo-9780.pdf>
- S4: Smith, S.J. (2016), Book Review: Waterton, E. and Watson, S., *The semiotics of heritage tourism*, *Annals of Leisure Research*, vol.19, pp.137-139.
- S5: Stamper, R., A semiotic theory of information and information systems, rapporteur: John Dobson, retrieved 2017, November 30, from: <https://assets.cs.ncl.ac.uk/seminaris/101.pdf>
- S6: Sterling, C., Book Review: Waterton, E. and Watson, S., *The semiotics of heritage tourism*, in: *Review of The Semiotics of Heritage Tourism*, retrieved 2017, November 30, from: <https://pia-journal.co.uk/articles/10.5334/pia.437/>
- T: Thrift, N.J. (2008), *Non-representational theories*, London: Routledge.
- U: Urry, J. (2002), *The tourist gaze*, 2nd ed., London: Sage. (初版 (1990 年) には加太宏邦訳『観光のまなざし』法政大学出版局がある)
- W1: Waterton, E. and Watson, S. (2014), *The semiotics of heritage tourism*, Bristol: Channel View Publications.
- W2: Whatmore, S. (1999), Hybrid geographies: Rethinking the human in human geography, in: Massy, D., Allen, J. and Sarre, P. (eds.), *Human geography today*, Cambridge: Polity, pp.22-40.
- Ω 1: 大橋昭一 (2015) 「アクターネットワーク理論の進展過程: 物質主義志向的なアクターネットワーク理論を中心に」『和歌山大学・経済理論』379 号、41-62 頁
- Ω 2: 大橋昭一 (2018) 「組織記号論と批判的記号論」『関西大学・商学論集』62 巻 4 号、157-185 頁
- Ω 3: 大橋昭一／竹林浩志 (2015) 「観光事業論におけるアクターネットワーク理論の意義: ポスト・アクターネットワーク理論をふまえて」『和歌山大学・観光学』12 号、15-25 頁

受理日 2019 年 5 月 24 日